

南部相撲の四角土俵と丸土俵

根 間 弘 海

1.0 はじめに¹⁾

南部相撲の古文書資料は個人の所有で、閲覧することがほとんど不可能だったが、最近、それが盛岡市教育委員会所蔵となり、以前のように閲覧が不可能ではなくなった。但し、閲覧は白黒マイクロフィルムによるもので、原本は未公開である。

この古文書資料を読んでいると、南部相撲には8種類の相撲があることがわかった²⁾。それは式正相撲、神前相撲、御前相撲、遊覧相撲、追善相撲、叡覧相撲、上覧相撲、軍陣相撲である。そして、相撲の種類によって土俵の形状や故実などが違っている。

本稿では、相撲の種類によって土俵の形状や故実がどのように類似し、どのように違うかを概説したい。古文書資料では詳細な説明がある相撲もあるし、そうでないものもある。それぞれの相撲はまったく別物ではなく、相互に関連がある。ある一つの相撲はある特定の相撲をベースにし、それを簡略化したり、変形したりしているのである。

南部相撲で最も基本となる相撲は「式正相撲」と呼ばれているもので、これについてはかなり詳しい説明がある。他の相撲はこの式正相撲を基にし、その一部を簡略化していることが多い。式正相撲は本稿でも他の相撲より詳しく扱うが、古文書に説明が少ない相撲はその扱いがどうしても少なくなる。

南部相撲ではどの相撲であっても、相撲を始める前に土俵上で土俵を清

める儀式がある。これは、江戸相撲で言えば、土俵祭のようなものである。この儀式も相撲の種類によって三宝の数や幣の数が異なっていたり、儀式を行う行司の数が異なっていたりする³⁾。また「本行事」が祭主となる相撲もあるし、平行司が祭主となることもある。南部相撲の「本行事」は、最高位の行司のことである。

儀式ではどの相撲であっても行司の「言い立て」があるが、この言い立てには長文のものもあり、その数も多い。古文書資料にはこの言い立てがたくさんあるが、これについては、残念ながら、本稿では何も触れない⁴⁾。江戸相撲でも昔は、南部相撲よりは少ないが、いろいろな言い立てがあったようだが、現在は場所の前日に行われる土俵祭だけとなっている⁵⁾。

なお、本稿では、便宜上、『相撲極伝之書』は『極伝書』、『相撲故実伝記』は『故実伝記』、『相撲答問詳解抄』は『詳解抄』として記す。

2.0 式正相撲

『詳解抄』の「極意印可式正之巻」に「式正とは相撲の式、故実正しく規矩準きくじゆんじよう繩を言う」とある⁶⁾。この式正相撲は「第一の御相撲」とも呼んでいる。つまり、故実を遵守した格式の高い相撲で、相撲の標準となるものである。「式正御相撲之巻」によると、式正相撲は「貴人」に見せる相撲だが、どのような貴人たちなのかははっきりしない。高貴な人たちのために特別に行う相撲のようだが、どのような「場合」に行われたのか確認できる資料はない。

2.1 式正相撲の土俵の形式

(1) 八角三重丸土俵

- (a) 一段目：10俵 (b) 二段目：16俵 (c) 三段目：24俵

合計50俵。一俵の長さは2尺3寸6分である。この長さはどの相撲でも、基本的に変わらない。

- (2) 土俵の内径⁷⁾：2間2尺4分⁸⁾。四本柱は渡し木で固定する。絵図で見る限り、どの相撲でも四本柱があれば、渡し木がある。つまり、四本柱だけがぽつんと立っているというものはない⁹⁾。
- (3) 柱の高さ：土俵面から1丈8寸¹⁰⁾。柱頭より下部2尺8寸のところに水引幕のため折釘を打つ。また土俵より上部3尺6寸のところに力紙のため折釘を打つ¹¹⁾。
- (4) 柱の形：八角柱。一角は3寸2分¹²⁾。2寸3分6厘の記述もある。
- (5) 柱の材質：乾は松，坤は楓，巽は柳，艮は桜である。
- (6) 柱頭：擬宝珠。青で着色する¹³⁾。
- (7) 四本柱：4色。相撲の種類によって絹か麻布で巻くが、その色は4色である。
- (8) 根元：荒薦で包む¹⁴⁾。「荒薦」は「新薦」で表すこともある。
- (9) 水引幕：黄色。渡し木に沿って張る。
- (10) 屋根：なし。芦の簀で天井を覆うこともある。

【追加説明】

(1) 土俵について

式正相撲の土俵は易に基づいて構築しているが、土俵の数については次のように述べている¹⁵⁾。

「片屋は一体易を象りしこと故、河図の法を表す故、八方堅にする。乾，兌，離，震，巽，坎，艮，坤の八卦を以て八方を堅めるなり。よって、八角に片屋を象るなり。尤も土俵は一，二，三段にして八方を堅める故に、一段目は10俵，二段目は16俵，三段目は24俵，都合50俵へ中央の五土を加え，55の数となる。これ，すなわち，河図の全数なり。」(『極伝書』の「式正相撲片屋ノ図左通」より)

八卦の方角を堅めるために土俵は八角にするが、土俵を3段にするのは

その効力を強くするためである。さらに、土俵の数も河図の法に基づいて決められる。一段目から三段目までの数字を合計すると50になるが、それに中央の5土の5を足すと、河図の全数55になるというわけである。

一段目は八卦を表すから、本来は10ではなく8である。不足の2をどのような根拠で出してきたかは、書いてないのでわからない。絵図を見ると、北と東を堅めるのに一つずつ俵を増やしているので、その方角に特別の意味があるようだ。いずれにしても、8を10にする理由は明確でない¹⁶⁾。

実際の土俵で用いる俵の数は50であって、55ではない。それでは「中央の5土」に当たる5俵はどこにあるのか。実は、その5俵は、相撲を始める前の儀式で供え物の大豆を入れた5俵のことである。

『極伝書』によると、土俵の数にもう一つの見方があり、土俵は「本来は48俵なり」という。すなわち、50俵の土俵より48俵の土俵が本来の姿である。この48俵を説明するには、12支が活用されている¹⁷⁾。

「... 48俵は乾，兌，離，震，巽，坎，艮，坤の数は36なり。12支を加え、48俵を以って八方堅として定める。相撲48手はこの片屋に備わることになる。八卦の数ゆえ、第一段目は 1×8 で8俵なり。第二段目は 2×8 で16俵なり。第三段目は 3×8 で24俵なり。都合48俵で、式正の全数が備わる。」(『極伝書』の「式正相撲片屋ノ図左通」より)

方角の八卦にそれぞれ1から8の数字を割振り、その数字を合計すれば36になる。それに12支の数字12を加えると、48になる。この48という数字は、式正相撲の理想的な俵数である。

北と南の柱に2俵ずつ置かなければ、48俵になるが、これは八卦の合計に12支の12を加えて説明するわけである。したがって、50俵にした場合と48俵にした場合は、その数字を説明する根拠が異なる。これからすると、

土俵は50俵の場合もあるし、48俵の場合もあることになる。50俵の場合、北と東の柱に2俵ずつ配置するが、48俵の場合はそれぞれ1俵ずつ配置する。

俵の数が50の場合、それは55から「5土」の5を引いたのではなく、元々の48に2を加えたものであるとする記述がある¹⁸⁾。その2は北と東に1俵ずつ重ねて配置する。理想的な土俵数が48だとすれば、その2は後から追加したという見方も成り立つ。しかし、その場合は根拠がはっきりしない。

河図の法に基づく55から中央の「5土」の5を差し引くと50になるが、これがなぜ50なのかの説明としては分かりやすい。この問題点は、先にも触れたように、八卦を表す8のところを2つ加えて10にするが、その2俵の根拠が明確でないことである。

式正相撲の理想的な俵数が48であれば、それを第一に考え、河図の法を活用しないほうが分かりやすい。48のまままったく問題ないからである。いずれにしても、48にしても50にしても、それを導き出す根拠をどれにするかによって説明が異なる。

式正相撲は「別式」で簡略化し、16俵にすることもある¹⁹⁾。これについては、次のように述べている。

「別式片屋にて中段の16俵ばかり用いることあり」(『極伝書』の「式正相撲片屋ノ図左通」より)

これは一段目と三段目を取り除き、二段目だけを残した土俵である。この「別式」は御前相撲の簡略化した一重丸土俵を指しているようだ。すなわち、簡略化した16俵の式正相撲があるのではなく、簡略化した一重丸土俵の御前相撲が式正相撲の16俵の形状になる。

(2) 柱の材質について

『相撲書』の「四本懸ノ事」の項でも、なぜそれぞれ特定の木を使用するかについては故実を述べてあるが、それが易でそのまま通じるものかどうか、私はわからない²⁰⁾。相撲の種類によって使用する木が異なるので、木の種類によってその故実があるのかもしれない。これは易の中でそれぞれの木にどういう故実があるかを吟味すれば、こじつけかどうか明らかになる。

(3) 四本柱の四色について

四色は四季や四方角の神を象徴する。これは、もちろん、五行説に基づいている。四本柱に四色が使われるとき、相撲の種類にかかわらず、同じ故実に基づく。東は青色で青龍、南は赤色で朱雀、西は白色で虎、北は黒色で亀を象徴する。

『極伝書』の絵図で見る限り、四本柱は四色でなく、薄い朱色になっている。これは故実が違っているか、絵図がそれを忠実に描いていないかである。おそらく、この絵図の場合、後者であろう。なぜなら、式正相撲は最も易の思想を反映したものであり、四方を四色とし、柱はその色で表すからである²¹⁾。実際、『故実伝記』には四本柱を四色で巻くことを述べている。

四本柱は四色で描かれているが、その色の方角が違っていることが他の相撲でも見られることがある。これは絵図を描いた絵師の勘違いによる場合が多い。また、巡業などで土俵を構築した人が勘違いし、それを絵師がそのまま描いたりしていることもある²²⁾。いずれにしても、五行説に基づけば、四本柱は四色である。

ところで、南部相撲の資料では、延宝年間（1673-1681）にすでに四本柱の4色が確認できる。江戸相撲でそれが確認できるのは『相撲家伝鈔』（正徳4年（1714））である。つまり、江戸相撲より40年ほど前である。おそらく、南部相撲では四色の4本柱がその頃使われていたであろう。し

かし、江戸相撲では正徳4年の頃、すでに四色の四本柱は使われていない。江戸相撲で正徳4年以前に、四色の四本柱が実際に使われていたことを証明する文献はまだ見つかっていない²³⁾。

(4) 四色の巻き絹の巻き方について

「神前角力ノ形屋」の項で、東と南の柱は左縄にし、西と北の柱は右縄にする」と述べてあるが、四色の巻き方がどの相撲でもこのように決まっていたかどうかはわからない²⁴⁾。四色の柱はどの相撲でも基本的に用いられているので、巻き方が決まっていたかもしれない。しかし、その巻き方をすべての相撲で確認できていないので、決まっていたと断言することもできない。

(5) 荒薦について

これは、基本的に、どの相撲でも柱の根元に巻く。なぜ巻くかということに関し、次のように述べている。「荒薦」は「新薦」で表すこともある。

「四方に四神を勧請せし故、清め候心にて新薦を以って包む候也」
 (『岩井流相撲故実問答書』より)

(6) 屋根について

南部相撲で屋根らしい屋根があるのは「遊覧相撲」だけで、他の相撲には基本的に屋根はない。屋根の代わりに、天井を芦の簀で覆うことはある。遊覧相撲の屋根は、絵図で見る限り、「切り妻」である。

(7) 水引幕について

中央は易で黄色を表す。四本柱の色と合わせて、5色となる。この黄色は「帝」も象徴する。

(8) 土俵の配置について

土俵の配置は式正相撲だけでなく、どの相撲でも易の思想に基づくが、これについては本稿では触れない。配置されている俵の数によって陰と陽に分かれるが、これを理解するには易の思想を詳しく理解する必要がある。どの相撲で俵がどのように配置されているかを知りたいければ、たとえば、『極伝書』の絵図を見るとよい。なお、^{なかすみ}中墨で俵の間に空きがあるが、これは「行司口」とか「鼠口」と呼ばれ、そこから行司や相撲取りが土俵へ上がったたり降りたりする。

2.2 式正相撲の儀式

相撲を始める前に行司による儀式が行われるが、本行事が祭主となる儀式を特別に「本行事式」と呼ぶこともある。この儀式では、神に捧げる供物が三宝に置いてあったり、神の依り代となる幣が置いてあったりする。神に捧げる供物は穀類、魚類、鳥類などであるが、それは詳しく述べる必要もないであろう。それぞれの品に何らかの意味があるかもしれないが、それは古文書に記されていない。

どの相撲でも儀式ではいろいろな「言い立て」を言上するが、式正相撲の場合、本行司は言い立てをするとき、土俵上で床机に腰掛けて行う。この言い立ての内容については、先にも触れたように、本稿でまったく触れない。

(1) 供物について

式正相撲の場合、土俵上では、白木の三宝は5個で、5本の幣が立ててある。その幣は5色である。それ以外に、東に麦、南に小豆、西に米、北に蕎麦を土俵の外に5俵ずつ、^{すきなり}杉形で積んでおく。中央は大豆だが、それは土俵上で5俵、やはり杉形で積んでおく²⁵⁾。杉形に積むとはピラミット形に積むことをいう。

(2) 軍配について²⁶⁾

本行司は「真丸団扇」を使うが、他の4名の行司は方角によって軍配が異なる。軍配の紐は黄色にする²⁷⁾。行司はすべて、最初は土俵外で座るが、後に土俵に上がる。座っているとき、軍配は腰に差している。そして、手に持っているのは幣である²⁸⁾。

- (a) 東の行司：拂子（スペード型）または卵型
- (b) 南の行司：丸団扇または三角瓢箪型
- (c) 西の行司：扇子
- (d) 北の行司：扇子

南の行司が持つ丸団扇は本行司の真丸団扇と形が似ていて、間違われやすいため、「師範団扇」を使用してもよいことになっている²⁹⁾。この団扇は丸みを帯びた三角瓢箪型で、下方部が瓢箪のように少しへこんでいる。

(3) 幣について

本行事は黄幣を持つが、他の4名の行司はすべて、方角によって幣の色が変わる。

- (a) 東の行司：青幣
- (b) 南の行司：赤幣
- (c) 西の行司：白幣
- (d) 北の行司：黒幣

【追加説明】

(1) 行司の服装について

本行事については、『極伝書』に次のように述べている。

「装束は烏帽子、水干、大口袴を着し、団扇を持ち、短刀を帯し、床几へ懸かり、鞆を履き、相控えるなり。但し言立ての節は団扇を腰に

差し、末広は衣文に差し、中央にて床几に懸かり、黄の幣を持ち、気を鎮め、意を納め、眼を閉じ、心静かに言上する。この式は相撲第一の儀式ゆえ、口伝悉く有り。」(『極伝書』の「式正相撲之節団扇本行事所作之図左之通」より)

さらに、4名の行司はその紋所に四色と四神をつけた装束をつける。

「装束は、4行事は側続四ノ袴を着る。紋は背に1つほどつける。4行事の紋だが、紋は、東は龍、西は虎、南は朱雀、北は亀である。」(『極伝書』の「式正相撲片屋ノ図左通」より)

なお、『極伝書』の絵図では、4名の行司は土俵の内側に座っているが、これはミスに違いない。というのは、儀式の説明にあるように、行司は土俵の外に座ることになっているからである。行司が「言い立て」をするときの図なら、行司は軍配でなく、色幣を持つ姿になっていなければならない。

(2) 団扇について

『詳解抄』の「式正相撲の各行司の持用器」には、行司の持つ軍配のことが詳細に述べてある。

「東方の行司は拂子(つまり、スベード型)長方形型(または卵形)である。これは出る日を表す。故に東方の者が持つ。

南方は丸形団扇である。これは日中を表す。故に南方の者が持つ。この団扇は本行司の真丸団扇と紛らわしいので、常団扇か唐団扇を用いることもある。

西方は扇(つまり、扇子に近いもの)である³⁰⁾。末広ともいう。これは日西山に傾くとき、扇子を揚げる譬えを表す。故に西方の者が持つ。

北方も扇なり。これは夜相撲には弥扇を用いることから、北方の者が持つ。

右のとおり、東西南北に判る。

象は

東は卯の方にて日出る頃なり。

南は午にて日中なり。

西は酉にて暮れ時なり。

北は子にて夜なり。

(中略)

団本は真丸団扇である。南方の丸形団扇と似ているけれども、別物である。これは表示に天地四方の気を写し、串に人事の諺を表す。(中略)。この節は、紐を黄色にして中央を顕す。」(『詳解抄』の「極意印可式正之巻」の「団本行事」より)

このように、式正相撲では行司の持つ軍配の形状が違うが、その故実が日中の時間帯と関係する。太陽は東から昇り、西に沈み、そして夜になるので、それを軍配の形状と結びつけている。

3.0 神前相撲

これは神に奉納する相撲だが、どの神かは必ずしもわからない。というのは、相撲を行う神社の祭神を祈ってもよいと述べているからである。

「祈願の神はその社の神を祈祷すべし。次に「建雷神」と「手力雄神」また四神の御柱勧請すべし。心中に天下泰平、国土安穩、武運長久、五穀成就、民安全と祈念し、謹んで行うべし」(『極伝書』の「神前角力ノ形屋」より)

『極伝書』の「神前片屋之図」によると、御前相撲は「建雷神」と「手

方雄神」に奉納する相撲で、これは毎年8月14日と9月5日に行われたらしい。この両日に特別に奉納相撲が行われたかもしれない。なぜその両日を選定されたのか、毎年その両日に実際に奉納相撲が行われたのかは、今のところ、わからない。

3.1 神前相撲の土俵と形式

この相撲は式正相撲の形式に近いが、いくつか違う点もある。

(1) 二重四角土俵

- (a) 一段目：16俵 (b) 二段目：24俵

合計で40俵。

- (2) 土俵の内径：2間2尺。式正相撲より4分狭い。
- (3) 柱の高さ：土俵面から1丈8寸。
- (4) 柱の形：四角柱が基本だが、六角柱の場合もある。一角は3寸8分。
- (5) 柱の材質：桧が基本だが、松の場合もある。
- (6) 柱頭：四角柱なら先端へ徐々に尖った形をしたもの。この四角垂型は「兜巾」と呼ぶこともある³¹⁾。六角柱なら、青の擬宝珠である。
- (7) 四本柱：4色だが、柱を青く塗り、それに四色の麻布を巻く。
- (8) 根元：荒薦で包む。
- (9) 水引幕：水引幕はないが、それに代わって注連縄を渡し木に吊るす。色は五色でも白色でもよい。また注連縄でなく、青和幣あおにきてでも白和幣しろにきてでもよい。
- (10) 屋根：なくてよいが、芦の簀で天井を覆うこともある。

【追加説明】

(1) 土俵について

四角土俵だが、俵の数は40俵。式正相撲の一段目をなくした形である。

この四角土俵は「角土俵」とか「角芝」と呼ぶこともある³²⁾。「角土俵」は「遊覧角力ノ図」の項に、「角芝」は「式正相撲形屋飾伝書」の「四本懸ノ伝」の項でそれぞれ確認できる。

- (a) 「角土俵の故実、地は方なる故、角とする」(『極伝書』の「遊覧角力ノ図」より)
- (b) 「行事、角力人、六根清浄にして右中央の角芝にて式正を行い、陰陽和合の取組を執行の時...」(『故実伝記』の「四本懸ノ伝」より)

天は円形、地は四角形とし、それゆえに土俵は四角形が自然だということらしい。四角は「角」と等しいので、四角土俵は「角土俵」と呼んでいい。『相撲書』の「角芝之事」には、次のように述べている。

「角力芝の故実と申すは、本来人形屋と称え申し候、故は、人は小天地なるゆえ、頭の丸きは天の像なり、足の角なるは地の形なり、天円地、方なるゆえ、地の角を表し、天地の理を以って、角芝となす法なり」

角芝の「芝」は土俵と同義に使われているが、なぜ「芝」なのかについては、次のように述べている。

「芝と號する故事は芝に二名あり。角芝は至て靈草なり。士气和め、王者の徳仁なる時はこの草生ずる。またこの草に青、赤、白、黒、黄、紫の色あり。右靈場の地ゆえ自然の理にてこの文(ことば)を用い、芝と称するなり」(『相撲書』の「角芝之事」より)

どうやら「芝」は草木の一種で、特別な靈草である。神聖な場所を表すために、土俵を靈草の名で呼ぶようになったらしい。陰陽道では、角芝という草木は「世界を象徴的に表すシンボル」らしく、その呼び名は陰陽道と関係があるようだ。

(2) 柱の巻き方について

四本柱を四色で巻く時には一定の巻き方があったようである。これについて、次のように述べている。

「四本柱は青、赤、白、黒の麻布を以って巻く。さて、東南の方は左繩に致し、西北の方は右繩に致し、注連繩を配すべし」(『故実伝記』の「神前角力ノ形屋」より)

たぶん、この巻き方は、先にも触れたように、どの相撲でも同じだったに違いない。しかし、古文書の8種類の相撲を述べた箇所では確認できる場合とそうでない場合がある。

3.2 神前相撲の儀式

絵図で見ると、三宝は4個あり、その上に神に捧げる供物が載せてある。その供物は式正相撲の場合とほとんど同じである。幣は2本で、それぞれ青色と白色だが、どの神の依り代かはわからない。奉納相撲なので、「建雷神」と「手力雄神」の二神が有力だが、相撲が行われる神社の祭神を祈祷することもあるので、必ずしも明白だとは言えない。

4.0 御前相撲

御前相撲は「貴人たち」のために行う相撲である。藩主に仕える臣下や貴賓をもてなす相撲である。「藩主」だけに見せるのを目的とした相撲は特別に「上覧相撲」と呼び、御前相撲と区別する。相撲を始める前に「儀式」があるが、祭主は本行事である。

(1) 本行司の装束について

これについては式正相撲の項で述べたが、「神前相撲ノ図」にそれを補足する記述がある。

「装束本式は白き長絹白指貫、烏帽子は三番烏帽子、短刀、白き熨斗

目着なり。合せ申し候は両の手にて幣帛を持ち、(土俵の)中に立ち神前へ向かい、神拝の如く合せ申し候。口伝至而有り。』(『極伝書』の「神前相撲ノ図」より)

神前相撲では正装の装束姿で、右手に幣を持つ。その幣帛の色はわからない。それは、おそらく、黄色であろう。丸団扇は腰の後ろ、短刀は左の脇にそれぞれ差す。

4.1 御前相撲の土俵の形式

土俵の形式は神前相撲をさらに簡略化したものである。

- (1) 二重丸土俵
 - (a) 一段目：16俵
 - (b) 二段目：24俵
- (2) 土俵の内径：2間2尺³³⁾。
- (3) 柱の高さ：土俵面から1丈8寸。
- (4) 柱の形：四角柱。六角柱を認める記述はない。
- (5) 柱の材質：桧または松。
- (6) 柱頭：先端へ徐々に尖った形をしたもの。
- (7) 四本柱：4色。
- (8) 根元：荒薦で包む。
- (9) 水引幕：黄色が基本だが、白幣でもよい。
- (10) 屋根：ない。しかし、芦の簀で天井を覆うこともある。

この御前相撲では二重丸土俵を基本とするが、簡略化して一重丸土俵にすることもある。そのときの土俵は、16俵となる。一重土俵のときは四本柱がないので、水引幕もない³⁴⁾。

【追加説明】

(1) 一重土俵について

「御前懸略式一重土俵ノ図」に次のように述べている。

「(この略式土俵は) 形屋がない時、丸芝を用いること。(中略)。形屋がある時は、角芝なり。」(『極伝書』の「御前懸略式一重土俵ノ図」より)

この表現は正しくないようだ。なぜなら形屋があっても丸土俵の相撲があるからである。たとえば、本格的な御前相撲には四本柱があるが、土俵の形は丸土俵である。屋根がなくても四本柱があれば、それは「形屋」であるはずである。

4.2 御前相撲の儀式

相撲が始まる前の儀式は、「諸仕方は前にあり」とあるように、基本的には、神前相撲の場合と基本的には同じである。絵図では、三宝は土俵上に2個あり、幣は1本である。その幣の色は記されていないが、おそらく、黄色であろう。三宝には神に捧げ物が載せてあるが、これも限定された品ではないであろう。

絵図には、行司が描かれていないので、儀式で行司がどのような所作をしたのかまったくわからない。

4.3 本行司と平行司

御前相撲では相撲取りも行司も他の相撲に見られない独特の作法がある。たとえば、土俵入りの儀式では、本行司の他に平行司2名が登場するが、その控え方が本行司と平行司では異なる。

また、相撲取りも土俵に上がる時や降りるとき、独特の所作で平伏する。たとえば、相撲取りは土俵に上って平伏するときは両手で「入」という字の形にするが、四股踏みをした後で退場するときはやはり両手で

「人」という字の形にする³⁵⁾。行司については、次のように述べている。

「… 平行司先に立つ。相撲取りを名乗り上げる。本行事は… 正装で床几へ懸かり、正面へ向かい、左右に行司が差し置き、控える。相撲取りが全部土俵に上がると、扇の柄を向こう側にし、執と言う合図で、相撲取り一同、謹んで平伏する。」(『極伝書』の「御前懸ノ図」より)

この「執」という合図は、現在、「^{けいひつ}警蹕」と言われている。興味深いのは、本行事が団扇の柄を向こう側に向けることである。すなわち、団扇の面の先を自分の方に向ける。三役力士の取組を捌くときも、同じような所作をする。これは敬意を示す所作に違いないが、一見すると、奇妙な所作である。

取組で立ち会う瞬間、江戸相撲では「軍配を返す」所作があるが、取組の前にそのような所作はしない。江戸相撲でも昔は、そのような所作があったかどうか、調べてみる必要がある。江戸相撲と南部相撲が共通の故実を持っていたのか、いつごろ別々の故実を持つようになったのかなど、追及してみたいものである。

5.0 遊覧相撲

これは別名「本寄相撲」とか「勸進相撲」とも呼び、大衆が見る相撲である。この相撲に本行事は登場しない。しかし、行司による土俵清めの儀式は行われる。

絵図では、神前相撲の場合と同じように、三宝が2個、幣が1本、土俵上においてある。幣は黄色である。

「形屋の中央に黄の幣を立てる。その前へ御神酒、鯛を供する。但し鯛がない場合は鱈でもよい」(『故実伝記』の「本寄相撲形屋ノ伝」より)

供え物は魚や神酒になっているが、魚にすべきだという決まりがあったかどうかはわからない。魚が望ましかったかもしれないが、それがなければ代わりの品でもよいという融通はあったような気がする。

5.1 遊覧相撲の土俵の形式

(1) 二重四角土俵

(a) 一段目：16俵 (b) 二段目：24俵

合計で40俵。

(2) 土俵の内径：2間2尺³⁶⁾。

(3) 柱の高さ：土俵面から1丈8寸。

(4) 柱の形：丸柱。太さは1尺6寸または1尺8寸。

(5) 柱の材質：桧または松。

(6) 柱頭：絵図からはわからない。柱頭の記述もない。

(7) 四本柱：4色の絹で巻く。

(8) 根元：荒薦で包む。

(9) 水引幕：『極伝書』では巻絹の5色。『故実伝記』では黄色にすることもある。

(10) 屋根：ある。屋根の東に青鯨，西に白鯨を載せる。『岩井流相撲故実問答書』によれば，青は男，白は女を表す³⁷⁾。

私の手元にある古文書には略式の遊覧相撲について述べた箇所は見当たらないが、16俵の一重四角土俵があった可能性は非常に高い。昭和27年ごろまで16俵の四角土俵の存在が確認できるからである。この16俵一重四角土俵は、おそらく、正式な40俵の遊覧相撲（つまり二重四角土俵）があった頃からその簡略化した土俵として存在していたに違いない。『極伝書』の「遊覧相撲ノ図」の後半で、16俵の土俵は追善相撲に限ると書いてあるが、これは本格的な土俵の場合を想定しているに違いない。というのは、

略式化された遊覧相撲でも16俵の一重四角土俵があるからである。

勸進相撲の土俵では、『勸進相撲之巻』にも記されているように、四方の中墨で、すなわち中央で俵の1俵分を開けることになっているが、簡略化した16俵の土俵では東西の2箇所だけでそのような「開き」を設けることもあったようだ。時には、もっと簡略化してどの方角にも「開き」を設けないこともあったらしい³⁸⁾。

【追加説明】

(1) 土俵について

遊覧相撲の土俵は式正相撲を簡略化したものである。式正相撲の一段目を取り除き、二段目と三段目を残した形である。土俵の数が40であるのは、洛書の全数45から、5土を差し引いたものである。また、40俵については、次のようにも述べている。

「勸進相撲の時は、土俵40俵は地の36禽へ四肢を表し40俵なり」（『極伝書』の「式正相撲片屋ノ図左通」より）

この40俵を「大極」とみなし、そこに角土俵と片屋を構築するのである。

「洛書の45の数のうち5を5土に取り、大極とする。（中略）角力は至而天地陰陽を分けるものなれば、勝ちを天とし、負けを地とする。角土俵は陰を表す。片屋を陽とする。」（『極伝書』の「遊覧角力図」より）

角土俵を陰、片屋を陽としているが、これは、基本的には、上のほうを陽、下のほうを陰とするのと同じである。

相撲の片屋を人に似せて説明し、「天地人の三才」とよく呼ぶが、これについては次のように述べている。

「人は元来、天地の像なり。頭の円を天に表し、足の方を地かたに象り候。木火土金水は形屋の内に備わる。形屋はすなわち、人体ゆえ、人形屋なり。上の人の字を略して形屋と呼ぶ。相撲取組の場、地は方なるゆえ、角芝に備わり候こと、古法なり。」(『故実伝記』の「式正相撲形屋飾極伝」より)

(3) 鯨について

なぜ屋根の上に鯨を乗せるかについては、不浄を排除し、土俵を清浄に保つためであるという。

「... 鯨は両儀を象り、または悪魔を祓い清浄を守ると有り。勸進角力は人群集のこと故、数人の内に不浄の者ある故、清浄の片屋へ不浄を入れないためである。鯨は海中にある時は前後左右、穢れのもの七十尋程除くとある。これによって不浄を祓うものである。鯨を上げる場合は、土俵は角土俵に限るべし。」(『極伝書』の「遊覧角力ノ図」より)

鯨を載せるときは、土俵は四角土俵でなければならない。なぜ丸土俵では鯨を載せていけないのかわからない。相撲を見る観衆を差別する思想が垣間見えるが、四角土俵と鯨との関連がはっきりしないのである。他の相撲も大衆が見ることがあるのに、あえて遊覧相撲だけ鯨を載せるにはもっと別の理由があってもよい。大衆以外の人には不浄の者がいないなどと行司たちは本気で思っていたのだろうか。「長いものには巻かれろ」的な発想がこの鯨の説明にはあるようで、すんなり受け入れるには抵抗がある。

故実の信憑性に疑問を呈してもまったく無意味なことだが、相撲の種類によって大衆とそうでない貴人たちを差別することは、やはりおかしい。どんな相撲にとっても土俵は神聖なものであり、それは見る人によって不浄になったり清浄になったりはしない。土俵を不浄から守るために鯨を載せるなら、どの相撲でも鯨を載せなければ一貫性がない。鯨を載せるだけ

で土俵は清浄を守ることができるとすれば、故実はそれだけで立派に生きるはずである。

(4) 水引幕について

もともとは芦の簀天井だったらしいが、それに代わって屋根を作り、鯨を乗せるようになった。

「水引巻絹5色なり。(中略)。水引の上は松の葉でも杉の葉でも細い
 柁で描くように致すべし」(『極伝書』の「遊覧角力ノ図」より)

遊覧相撲では、このように、水引幕と屋根の間に松の葉とか杉の葉の模様を描いているが、それにどういう意味があるかはわからない。何か深い意味があるような気がする。

水引幕の巻き方は、江戸相撲と同じように、北の柱から巻き始め、東、南、西へと順に張り、北で巻き納めることになっている。

「水引は右回りに北の柱より巻き始めて北で巻き納める。これ、天は右遣(つまり右回り)、地は左遣(つまり左回り)であることを表す」
 (『詳解抄』の「極意印可式正之巻」の「四本懸」より)

この意味づけは、江戸相撲の古書で見るとかなり異なる³⁹⁾。

6.0 追善相撲

この相撲は死者の追善供養を目的として行うもので、遊覧相撲と同様に、本行事式はない。しかし、土俵を清める儀式は執り行われる。

6.1 追善相撲の土俵の形式

- (1) 一重四角土俵：土俵は四角土俵で、16俵である。
- (2) 土俵の内径：2間2尺。これは確認できないが、遊覧相撲と類似す

るので、たぶん、この広さだったであろう。

- (3) 柱の高さ：土俵面から1丈8寸。
- (4) 柱の形：四角柱。一角の寸法に関する記述はない。
- (5) 柱の材質：不明。
- (6) 柱頭：5輪。これは「木火土金水」を象っている。
- (7) 四本柱：4色の絹で巻く。
- (8) 根元：荒薦で包む⁴⁰⁾。
- (9) 水引幕：ない。その代わりに、渡し木に造花の「藤の花」を吊るす。
造花の数が記述されていないが、絵図で見る限り、一方角に3本ずつ吊るしてある。
- (10) 屋根：ない。

【追加説明】

(1) 土俵について

故実は遊覧相撲と同じである。洛書の全数45から5土を取り、さらに24俵を差し引くと、16俵になる。追善相撲では、16俵以外の土俵はない。

6.2 追善相撲の儀式

土俵には「紅白の蓮華」を飾るが、「紅」は右、「白」は左に置く。

「供え物は時宜に応じ菓子を供える。また紅白の蓮華を飾る。(中略)。蓮華は、紅は南の方に立てる。白は北の方に立てる。」(『故実伝記』の「追善ノ形屋ノ式」より)

絵図には、三宝が土俵上で3個あるが、供え物は不明。菓子を供えるとあるが、他のものも供えたに違いない。土俵上では、幣は1本も立てられていない。

7.0 観覧相撲

観覧相撲は皇族方のために行う相撲である。この相撲では他の相撲と違い、儀式でも「言い立て」がたくさんある。観覧相撲の場合、本行司が言い立てをするとき、土俵下で行う。

7.1 観覧相撲の土俵の形式

(1) 三重八角丸土俵

- (a) 一段目：8俵 (b) 二段目：16俵 (c) 三段目：24俵

合計で48俵。1俵は2尺3寸6分。

- (2) 土俵の内径：2間2尺4分。
 (3) 柱の高さ：土俵面から1丈8寸。
 (4) 柱の形：八角柱。一角は3寸3分6厘。
 (5) 柱の材質：桧。
 (6) 柱頭：八角柱の上に円形。
 (7) 四本柱：4色の絹を巻く。
 (8) 根元：荒薦で包む。
 (9) 水引幕：黄色の麻布を張る⁴¹⁾。
 (10) 屋根：ある。芦の簀で天井を覆う。

7.2 観覧相撲の儀式

幣は5本でなく、3本を立てる。

「形屋の内へ青幣白、白幣帛、黄幣帛を立てる。」（『故実伝記』の「観覧相撲極伝ノ書」より）

供え物は白木の三宝に載せるが、三宝がいくつかはわからない。

8.0 上覧相撲

古文書ではこの相撲が誰のために行うか明記されていないが、藩主のために行う相撲のことを指す⁴²⁾。江戸相撲では將軍のための相撲を、普通、上覧相撲と呼ぶ。

8.1 上覧相撲の土俵の形式

(1) 二重丸土俵

- (a) 一段目：16俵 (b) 二段目：24俵

略式で、一重丸土俵もある。そのときは、16俵。

- (2) 土俵の内径：2間2尺4分。
 (3) 柱の高さ：土俵面から1丈8寸。
 (4) 柱の形：六角柱。一角は3寸8分。赤色で着色する。
 (5) 柱の材質：不明。
 (6) 柱頭：六角柱の上に円形。
 (7) 四本柱：4色。
 (8) 根元：荒薦で包む。
 (9) 水引幕：黄色の絹で張る。
 (10) 屋根：ない。芦の簀で天井を覆う。

8.2 上覧相撲の儀式

土俵には3本の幣帛を立てる。

「形屋の内へ青，白，黄の幣帛を建てる。」(『故実伝記』の「上覧相撲形屋極伝」より)

供え物は白木の三宝に載せるが、三宝がいくつかはわからない。

9.0 軍陣相撲

軍陣相撲は軍を鼓舞するのを目的とした相撲で、戦陣へ赴く前に行う。この相撲については、次のように述べている。

「軍陣角力は軍の吉凶を定める...」（『故実伝記』の「軍陣相撲ノ形屋ノ伝」より）

戦いに望むときは勝ちたいと思うのが人情なので、行司は相撲の取組を裁くとき慎重だったに違いない。勝敗が占いと直結するわけだから、行司がどのように勝敗を捌いたか興味のあるところだ。

この軍人相撲でも相撲を行う前に「儀式」が行われるが、それは他の相撲と少し異なっている。すなわち、東西の柱に弓矢を立てるのである。その矢は「流鏑^{かぶらや}矢」というものである。これについては、「軍陣相撲ノ形屋ノ伝」の項に述べてある。

9.1 軍陣相撲の土俵の形状

(1) 二重丸土俵

(a) 一段目：16俵 (b) 二段目：24俵

略式で、一重丸土俵もある。そのときは、16俵。

- (2) 土俵の内径：2間2尺。
- (3) 柱の高さ：1丈8寸。
- (4) 柱の形：柱はそのまま、丸み1尺6寸くらい。
- (5) 柱の材質：桧。
- (6) 柱頭：先が尖がった形。色は着色しない。
- (7) 四本柱：4色で、麻か木綿で巻く。
- (8) 根元：荒薦で包む。
- (9) 水引幕：注連縄。白幣を用いてもよい。
- (10) 屋根：ない。芦の簀で天井を覆う。

【追加説明】

(1) 水引幕について

水引幕の代わりに注連縄を用いるが、白幣でもよい。しかし、それだけだったかどうか、はっきりしない。というのは、次のような記述もあるからである。

「... 黄色の絹を以って水引を張り、また形屋内法にて二間二尺四方上は板葺き、柱の根へ荒薦を巻くべし」(『故実伝記』の「軍陣相撲ノ形屋ノ伝」より)

9.2 軍陣相撲の儀式

『故実伝記』の「軍人相撲ノ形屋ノ伝」に項によると、供え物は米、神酒、鯛、鱸などである。供え物は三宝に載せたはずだが、その三宝が何個なのかはわからない。幣は1本だが、それは黄色である。

「幣は黄の幣を立てるべし。供え物は御酒、鯛、鱸の内、一折...」
(「軍陣相撲ノ形屋ノ伝」より)

このように、相撲によって幣の本数は異なるが、供え物は大体同じである。ただ、式正相撲の場合は、供え物や幣の本数が他の相撲の場合と違っている。

10.0 おわりに

8種類の相撲を見てきたが、土俵の形状や土俵数の観点から互いにどういう関係にあるかを簡単にまとめておこう。

- (1) 式正相撲は基本となる相撲で、三重丸土俵である。
- (2) 神前相撲は式正相撲から一段目を取り除いた相撲で、二重丸土俵である。
- (3) 御前相撲は神前相撲と同じで、二重丸土俵である。簡略化した一重

丸土俵もある。

- (4) 遊覧相撲は御前相撲や神前相撲の二重丸土俵を二重四角土俵にしたものである。屋根に2匹の鯨を載せる。簡略化した16俵の一重四角土俵もあったに違いない。
- (5) 追善相撲は遊覧相撲から二段目を取り除き、一重四角土俵である。
- (6) 叡覧相撲は式正相撲と同じで、三重丸土俵である。
- (7) 上覧相撲は御前相撲や神前相撲と同じである。
- (8) 軍陣相撲は御前相撲、神前相撲、上覧相撲と同じである。

同じ土俵の形状であっても水引幕、屋根、柱の形状、柱頭、柱の材質などで細かい違いがある。行司たちはその違いにもっともらしい説明をしているが、その説明は易の思想に基づいていることが多い。本稿では、その説明が易の思想を正しく反映しているかどうか、検討することはしていない。これは私の能力をはるかに超えるもので、検討など無理である。

故実についても一言触れておきたい。土俵の形状と故実とはどちらが先にあったかという問いである。歴史的には、土俵が先にあったに違いない。故実は後からできたものである。その逆はない。しかし、易の思想で土俵を説明するようになって、それに合うように土俵の形状が変えられている。そして、その結果、相撲の種類がいくつかできたと見るのが自然であろう。

四本柱の色も最初から四色ではなかったに違いない。最初は、土俵の領域を定めたり、屋根をかけたりするために柱を四方に立てたであろう。昔は、野天で相撲は取ったので、暑さや雨を防ぐ必要があった。そのうちに、柱に易の思想から「四色」をつけ、それが四季や四神を表すと意味づけをする。それが四本柱の故実となったのである。

四角土俵は南部相撲の特徴の一つだが、これはもちろん、勧進相撲の土俵として有名である。これは明治初期までは続いているが、明治20年代に

は丸土俵も徐々に使われ出している。大正期には丸土俵が優勢になり、四角は大規模の相撲ではほとんどなくなっている。白圭氏の「南部相撲雑考」(昭和17年(1942))や三木氏の「珍説南部の四角土俵」(昭和8年)に述べてあるように、地方相撲では昭和8年頃まで四角土俵が細々とまだ生き延びていたらしい。ところが、『大相撲』(昭和59年3月号, p.129)によると、昭和28年頃までもその四角土俵はあったという。また、舟山氏が老齢の方々に尋ねてみると、昭和28年ごろまでは盛岡市周辺の勧進相撲があったとき、熊谷という行司が四角土俵で相撲を捌いていたというのである⁴³⁾。

注

- 1) 謝辞: 本稿をまとめる過程では、岩手県立博物館の舟山晋先生とメールで意見をよく交換し合った。また、資料閲覧に際しては盛岡市中央公民館と専修大学図書館の相原さんに大変お世話になった。ここに改めて、各位に感謝の意を表す。
- 2) 本稿は主として古文書資料の『相撲極伝之書』に基づいているが、それがいつ書かれたかははっきりしない。享保年間以降であると推定しているが、それ以前から8種類の相撲があったのか、それ以降にそのような種類ができたのかはわからない。しかし、延宝3、4年に生方治郎兵衛家勝が記した巻物30巻に同様の記述があるので、相撲の種類は延宝年間にすでに存在していたと見るのが自然である。
- 3) 南部相撲では行司を「行事」と表しているが、本稿ではどちらの表現も区別することなく使っている。したがって、「本行事」も「本行司」と表すこともある。
- 4) 南部相撲の「言い立て」は延宝3、4年のものもある。本稿では紙幅の関係で触れられないが、機会があれば、いつか触れたい。
- 5) 江戸相撲でも戦前までは土俵祭や巡業などで長文の言上を述べている。これについては、根間(2004)にも書いてある。
- 6) この「規矩準繩」は標準、基準、モデルといったことを表す。
- 7) 土俵の内径は四角土俵では一辺の長さ、丸土俵では直径を表す。
- 8) 『秘事下之巻』によると、2間2尺4分が普通だが、2間の場合もあると述べている。
- 9) 南部相撲では、四本柱のことを「四本懸」と表している。本稿ではどちらの表現も自在に使っている。
- 10) 『式正御相撲之巻』や『秘事下之巻』には四本柱の高さが1丈となっている。

厳密には1丈8寸だが、1丈でもよいということだったかもしれない。

- 11) この2尺8寸は「天の28宿」を表し、3尺6寸は「地の36禽」を表すという。
- 12) 柱の八角は「乾，兌，離，震，巽，坎，艮，坤の八卦」，六角は「東西南北と天地」，四角は「東西南北」を表す。これは、たとえば、『相撲書』の「四本柱ノ法」の項に述べてある。要するに、柱の形にもそれなりの「意味づけ」がある。
- 13) 絵図で見る限り、擬宝珠の色は朱になっている。絵図と故実が一致しないことがときどきある。おそらく、この式正相撲の場合、故実に忠実であれば、「青」が正しい色であろう。
- 14) 絵図を見る限り、根元を荒薦で包んでいない。これは絵図のミスに違いない。「故実伝記」には荒薦を用意することが記されている。もしそれを巻かなかつたなら、それを準備することも無いはず。
- 15) 古文書からの引用では表現、語句、句読点などを少し変更してある。
- 16) 北は「天一水を生ず」というように、最も重要な方角であり、始終の本となる。相撲では水引幕も北柱から巻き始め、そこで巻き納める。
- 17) この48という数は相撲の48手とも関係があるようだ。
- 18) これは『詳解抄』の「極意印可式正之卷」の「地祭」の項に詳しく述べられている。土俵は「本来48俵だ」とするので、この余計な2俵については「別の意味づけ」が必要になるわけである。
- 19) この「別式片屋」は紛らわしい表現である。「別式」は別の種類の相撲を表していると解釈するのが自然であろう。式正相撲に簡略した相撲はないからである。
- 20) それぞれの木をなぜ四方に用いるのかについては、『相撲書』の「四本懸ノ事」の項や『極伝書』の「式正相撲片屋ノ図左通」の項で述べている。そこで延べたある根拠が易でそのまま通じるものかどうかはわからない。
- 21) 式正相撲でも四色でなく、朱色を用いてもよいとする故実があるかもしれないが、『極伝書』ではそのような記述はない。江戸相撲の四本柱は安政5年(1858)頃まで朱色だったが、それと関係があるかどうかはわからない。
- 22) たとえば、『南部絵巻物』(pp. 58-60)に南部相撲の土俵を描いた絵があるが、柱の一つが「黄色」になっている。すなわち、中央の色である。これは絵師の間違いでなければ、土俵を構築した人の勘違いによるものである。巡業相撲では開催地の素人に依頼し、土俵を前もって構築することがあったらしい。
- 23) 江戸相撲で四色の四本柱が使われ出したのは、安政5年(1858)ごろである。四本柱の色については、根間(2005)でも扱っている。
- 24) 南部相撲では「形屋」「片屋」「方屋」という表現がよく使われる。厳密には、それぞれ「意味」するものが違うかもしれないが、本稿ではほとんど区別することなく、どちらの語句も適当に使っている。
- 25) 絵図では、中央を米、西を大豆と書き換えてあるが、説明では中央を大豆、西を米としている。『詳解抄』の「供物」でもそのようになっている。
- 26) 南部相撲では行司の位などによって軍配を「団」や「団扇」のように区別して

- いるが、本稿では区別することなく「団扇」,「軍配」,「軍配団扇」を用いて表す。軍配の呼び名も歴史的には変化してきたが、相撲の規定では「軍配」となっている。しかし、行司たちは「団扇」をよく使用している。
- 27) 本行司の真丸団扇の紐は「紫」だが、それを式正相撲では「黄色」に変えるらしい。黄色は中央を表す色だからである。そうすれば、五行説の5色と一致する。
- 28) 4名の行司は言い立てのとき、軍配ではなく、それぞれの幣を持って言上する。
- 29) 『式正御相撲之巻』では、「本行事は式正の団なり。前行事は師範団扇なり。」とあるので、東西南北の行司はすべて「師範団扇」と用いることもあったようだ。これに従えば、「式正相撲片屋ノ図左通」の4行司が持っている軍配は正しい。
- 30) 『極伝書』の図によると、この扇は「中啓」である。これは扇子に似ているが、下部は扇子のように開かない。
- 31) 「秘事下之巻」に「四角の時は先5寸を兜巾頭にそぎ申し候」とあるように、四角柱では兜巾頭にし、柱の頂上5寸となっている。
- 32) 四角土俵の「角芝」に対応して丸土俵を「丸芝」と呼ぶこともある。これは『極伝書』の「御前懸略式一重土俵ノ図」に出ている。
- 33) 『御前相撲之巻』(延宝4年)では2間2尺4分となっているが、「ご主人」のお好みで寸法は変わることもあるという。
- 34) 御前相撲には土俵を築かないで行う相撲もあったらしいが、これは藩の屋敷内で、身近な臣下をほんの少しだけ伴って観覧したものであろう。
- 35) 南部相撲では「四股踏み」を「地踏」とか「地拍子」と呼んでいる。
- 36) 『勸進相撲之巻』(延宝4年)では2間2尺4分となっている。
- 37) この有名な鯨は確実に享保年間には現れているが、それ以前の相撲でも載せているかとなると、必ずしもはっきりしない。延宝年間の古文書資料には鯨を屋根に載せるという記述はない。たとえば、『勸進相撲之巻』(延宝4年)には「屋根は簀天井に仕なり、又天井は無くとも不苦」とある。鯨が屋根に必須のものであったなら、天井は無くてもよいと書かないはずである。なお、管敬愛氏の「南部相撲起原史」(第2回)によると、鯨は元々「龍虎」を象ったものだが、いつのまにか「鯨」になったという。何に基づいてそのように述べているか調べていないので、その真偽は分からない。
- 38) 南部相撲の16俵四角土俵は昭和4年の絵葉書でも確認できるが、この土俵には中墨でまったく開きはしない。すなわち、土俵はびっしり詰まって配置されている。
- 39) たとえば、『古今相撲大全』や「相撲伝秘書」などでは水引幕を北の柱から巻き始め北の柱で巻き納めることは述べてあるが、天と地の動きに関しては何も述べていない。
- 40) 『極伝書』の絵図では根元を荒薦で包んでいないが、それはおそらくミスに違いない。古文書で述べてあるように、荒薦が神を勧請するためであれば、追善相撲でそれを巻かない理由はないはずだからである。

- 41) 『故実伝記』の「叡覧相撲極伝ノ書」では「天幕」という用語が使われているが、これは「水引幕」と同じであろう。
- 42) 小林(1998)によると、正保(1647)6月に藩主のための上覧相撲が行われている。天和2年(1682)9月にも上覧相撲が行われている。
- 43) 舟山氏は南部の四角相撲がいつ頃まで行われたかを老齢の方々に確認していて、その年代が昭和27年ごろだとわかったそうである。しかし、その人たちが実際に相撲を取ったのではなく、消防関係の先輩方が話をしているのを実際に聞いたものだという。信頼してよい情報である。相撲場はお寺の中にあったが、すぐ壊してしまうので、その相撲場を確認することはできないということだった。

参考文献

- 綾川五郎次, 大正3年, 『一味清風』, 学生相撲道場設立事務所。
- 管敬愛(編), 大正8年～9年, 「南部角力起原史」『角力世界(1)～(9)』第80号～第92号。
- 木梨雅子, 1999, 「南部相撲の方屋形状と故実」『体育史研究』第16号, pp.13-24。
- 木梨雅子, 平成16年, 『鶴の守る地に祈りは満ちて』, 旧盛岡藩士桑田(発行)。
- 国香洋子(文)・小保内東泉(画), 昭和55年, 『南部絵巻物一陸奥の風土』, 熊谷印刷出版部。
- 小林文雄, 1998, 「近世初期の藩政と芸能」『米沢史学』第14号, pp.1-12。
- 白圭逸人, 1942, 「南部相撲雑考」『野球界』32巻13号。
- 『南部相撲資料』(古文書(1)～(9)), 盛岡市中央公民館(所蔵)。その中に『相撲極伝之書』, 『相撲答問詳解抄』, 『相撲書』, 『相撲故実問答書』, 延宝年間の相撲巻物30巻などが数多く含まれている。
- 「南部のすもう史話」(10回連載), 昭和61.1.28～2.9, 『デーリー東北』。
- 八戸市博物館(編集・発行), 2003, 『大相撲展』(小冊子)。
- 八戸地方角力協会(発行者), 2000, 『水戸南部のすもうの歴史』(小冊子)。
- 花巻市博物館(編), 2004, 『盛岡市南部家20万石の美』, 花巻市博物館。
- 古河三樹, 昭和43年, 『江戸時代大相撲』, 雄山閣。
- 松浦静山著, 中野幸彦・中野三敏(校訂者), 1977, 『甲子夜話』(巻14), 平凡社／原著は文政4年(1821)起筆の『甲子夜話』(巻14)である。
- 枡岡・花坂, 昭和53年, 『相撲講本』(復刻版), 誠信出版社／オリジナル版, 昭和10年。
- 三木愛花・山田春塘, 明治35年, 『相撲大観』, 博文館。
- 三木愛花, 昭和5年, 『国技角力通』, 四六書院。
- 三木愛花, 昭和8年, 「珍説南部の四角土俵」『野球界』(夏場所号)23巻第7号, [相撲関係の拙稿]
- 根間弘海, 1998, 『ここまで知って大相撲通』, グラフ社。
- 根間弘海著・岩淵デボラ訳, 1998, 『Q&A 型式で相撲を知る SUMO キークエストion 258』, 洋販出版。

- 根間弘海, 2003, 「相撲の軍配」『専修大学人文科学年報』第33号, pp. 91-123.
- 根間弘海, 2003, 「行司の作法」『専修人文論集』第73号, pp. 281-310.
- 根間弘海, 2003, 「行司の触れごと」『専修大学人文科学月報』第207号, pp. 18-41.
- 根間弘海, 2004, 「土俵祭の作法」『専修人文論集』第74号, pp. 115-141.
- 根間弘海, 2004, 「行司の改姓」『専修大学人文科学年報』第211号, pp. 9-35.
- 根間弘海, 2004, 「土俵祭の祝詞と神々」『専修人文論集』第75号, pp. 149-177.
- 根間弘海, 2005, 「由緒ある行司名」『専修人文論集』第76号, pp. 67-96.
- 根間弘海, 2005, 「土俵入の太刀持ちと行司」『専修経営学論集』第80号, pp. 169-203.
- 根間弘海, 2005, 「軍配の握り方を巡って(上/中/下)」『相撲趣味』第146号~第148号.
- 根間弘海, 2005, 「軍配房の長さ」『専修人文論集』第77号, pp. 269-296.
- 根間弘海, 2005, 「行司の改名」『専修大学人文科学年報』第218号, pp. 39-63.
- 根間弘海, 2005, 「四本柱の色」『専修経営学論集』第81号, pp. 103-147.
- 根間弘海, 2005, 「軍配房の色」『専修経営学論集』第81号, pp. 149-179.
- 根間弘海, 2006, 「軍配の型」『専修経営学論集』(本号).